宇出津物語

「宇出津物語」刊行にあたって

ずっと人口増加の道を歩んできた日本も、平成 22 年をピークとして減少傾向をたどっています。能登半島でも特に奥能登においては、その減少率は顕著に現れてきています。当然、国策的対応がされてはいるものの、その効果がすぐ現れるというものではありません。行政がやるべきこと、地域が頑張っていくこと、そして私たち一人ひとりができることを、認識を共有して捉えていくことが大切ではないでしょうか。

そうしたなか、地方に移住するといったケースをよく耳にするようになってきました。地方に住んでいる人たちは、自分の住んでいる地域の良さに気づかないでいるのかもしれません。あるいは当たり前の日常にどっぷり浸かり気づかないでいるのでしょうか。地方の魅力というものは、日常における当たり前の生活の中にあるのかもしれません。

そこで、地方に住んでいる人たちに、地元を再発見してもらうことも含め、「宇出津物語」と称して、調べたことなどをまとめてみました。

宇出津に生まれ、そして育っていても、意外に宇出津のことを知らないということがよくあります。また、「へぇー宇出津ってこんな時代もあったのか。こんな人がいたのか」などと、驚いたり感動したりすることも、探せば結構あるものです。

今、地元に住んでおられる方には、この物語を読んでもらい、宇出津に生まれ育ったことを誇りに思っていただければ幸いですし、宇出津を離れて全国各地に住んでおられる方々にも、是非読んでいただき、ふるさと宇出津の魅力を再認識してほしいと思っています。

そして、これから育っていく私たちの子や孫たちの心の中に、しっかりと「宇出津」が生き続けていくためにも、今を生きる私たちは、皆「宇出津びと」としてこの地域の一員となり、それぞれがその役割を担っていきたいものです。

どの地域にもそれぞれに、人の心を和ましてくれるような物語はあります。ふるさとを思うことのヒントになればと思うので、どうか宇出津に関りがない方でも、ご自身の故郷に置き換えて読んでみてください。共感できるものがあると思います。

最後に、この物語作成のために、現地取材等でお世話になった関係各位に、紙面を借りて心からお礼申し上げます。

平成 29 年 4 月吉日

石川県鳳珠郡能登町立宇出津公民館長

（1） 地名と苗字

現在の「宇出津」という街がいつごろからできたのでしょうか。そんなことをふと考えてみました。でも、縄文時代の遺跡が今の崎山にあったことは事実です。能登町の埋蔵文化財地図を眺めると、今の宇出津域にはあちこちにそれを示す跡があります。いずれにせよ縄文時代には人が住んでいたのは間違いないようです。いや、縄文時代より先の石器時代にも住んでいたかもしれません。

ところで、書面で宇出津が表されたのはいつごろだろうかと調べてみると、承久３年（1221）の大田文に、「珠洲郡に宇出村　十町七段、承久二年検立定」とあり、これが最も古いようです。伝えに、今も「田の浦」方面を「元宇出津」といい、現に羽根のニ字を別称「大宇出津」と呼んでいます。この羽根と田の浦の中間あたりを宇出津発祥の地と伝えています。古代後期、このあたりに成立した聚楽の「宇出」が、古代末期から中世にかけてその中心を入り江（現宇出津）の周辺に移し、港町（津）となって、諸橋荘の成立する13 世紀の半ば過ぎに「宇出津」と記されるようになったのであろうとあります。（「能都町史第５巻」）

さて、宇出津は、中世から近世にかけて、いわゆる各地との交易が盛んになってからは、この奥能登でも活気あふれた地であったといえます。現在のように陸上交通が主となる以前は、海上交通に頼るところが大でありました。そのようなことから、天然の良港を要する宇出津は、近郷近在から産物が集積され、交易の要所として栄えてきました。このことは、併せて近郷近在から次男坊以下が職を求めて、あるいは商売を営もうとして集まってきた地ともいえます。人が苗字を名乗るような時期と重なったのか、出身地の名前を苗字とする者が多くいました。その時の約束事として、出身地の名前を使用する場合はその出身地から離れる場合に限るのであって、出身地を苗字として出身地に残ることはなかったよう伝え聞いています。その痕跡が、現在の宇出津にある苗字を見ていても窺い知ることができます。

ボンネット型の国鉄バス
（弁天島海水浴場：昭和 30 年代）

宇出津近辺の地名を苗字にしているものを揚げてみると、

飯田、石井、猪平、鵜川、越中、小浦、大谷、国重、源平、越坂、笹川、鈴ヶ嶺、蛸島、田代、立壁、寺分、時長、長尾、布浦、波並、羽根、久田、藤波、間島、松波、真脇、馬渡、矢波、山田、山中、吉尾、輪島

という苗字を見ることができます。よく見ると、鵜川から真脇までの海岸線にある地名が全て見えます。鵜川さん・矢波さん・波並さん・藤波さん・羽根さん・小浦さん・真脇さんは皆、宇出津に住んでおられますが、宇出津さんはいません。しかし、鵜川へ行くと牛津さんがありますが、鵜川さんはいません。鵜川から真脇までの海岸線の集落だけをみても、地名と苗字が同一である方はいませんでした。

「出身地の名前を使用する場合はその出身地から離れる場合に限る」としていた時代から、今後は転居などで地名と苗字が同じになる場合も出てくるでしょう。でも、こんな昔の人の申し合わせがある期間受け継がれていたのだと思うと、これから苗字を尋ねるのも面白さが増してきますね！

そして、宇出津に近郷近在の地名を苗字としている人たちが沢山住んでいるということは、元気で活況だった時代を彷彿させるもので、私たちの先祖が築いてくれたこの「宇出津」を、活気ある街にしていくことが、今の私たちに課せられた使命のように感じます。

昭和 30 年代の宇出津

起舟の日の宇出津港

今月号の公民館だよりから「宇出津物語」を連載していきます。宇出津のことで皆さんが興味を持ちそうなことなどを揚げていこうと思っています。そして「宇出津」に生まれ、育ったことを誇りに思い、ますます愛着を持っていってくれたらなと願い、私なりに調べたことなどを紹介してゆきますのでお楽しみください。

（2） 銭湯が育てた宇出津びと

現在、宇出津には銭湯（お風呂屋さん）が２軒ありますが（平成 25 年までは３軒）、昭和 30 年代には６軒ありました。最も古いのが明治 40 年創業の「澤乃湯」（通称「町の湯」）、そして大正に入って「湊湯」（同「新町の湯」）、「松乃湯」（同「新村の湯」）、その後「棚木の湯」、「福徳乃湯」（同「田中の湯」）、「万田乃湯」（同「万崎の湯」）ができました。当時の宇出津の人口規模で６軒もの銭湯があったということは、人口密度からいっても県下で一番であったように思われます。銭湯の数は、その町の繁栄に比例するということを耳にしましたが、漁業を中心とした当時の宇出津町の賑わいが目に浮かぶようでもあります。

家風呂が少なかった時代、タライで行水をする家が多かったときに、銭湯が人気を集めたのは当然のことと思えます。近代に入ってからの銭湯は、温かい沸かし湯に全身をつかることができ、洗い場にはカランを押せばお湯や水が出て、それこそ大変便利な空間であったことは想像できます。

そして銭湯は、身体を清潔にしてくれるだけでなく、集まってきた人たちとの語らいの場でもあり、情報交換の場でもあり、何よりも老いも若きも子どもたちも一緒になって、人間社会のマナーやルールを学ぶ場でもあったのです。「お前、どこのあんちやったいや」。「わっちゃばーさま、いくつになったぎや」など、それこそ今でいう、近所の目が暖かく行き届くコミュニケーションゾーンであったのです。

昭和 40 年代頃から家風呂が普及しだし、その頃には６軒あった銭湯が３軒となっていました。そして、公共の宿の浴場、温泉浴場の開業、福祉施設の浴場などを利用する人も増え、ますます銭湯利用者が減っていったのです。

湊湯玄関（50 年前と現在）

そうしたなかにおいても、銭湯を愛する根強い利用者に支えられ、今日でも２軒の銭湯が営業を続けておられます。

壁に描かれたペンキ絵の風景を眺め、大きな浴槽につかり、漁や仕事に疲れた体を温め癒す姿を想像してみるだけでも、銭湯ファンの心がわかるような気がします。

ペンキ絵といえば、宇出津に銭湯が６軒あった当時の各銭湯に描かれたペンキ絵を紹介すると、

●澤乃湯：富士山と三保の松原

●湊　湯：城山（遠島山）と離れ島
●松乃湯：田ノ浦と弁天島

●福徳の湯：天橋立
●棚木乃湯：城山から宇出津市街（湾）を望む景色
●万田乃湯：松島

いずれも、確かに癒される眺めです。

ところで、家風呂が普及し始めた頃、近所の親せきや友人宅の家風呂に「もらい湯」をしたことを思い出しました。今思えば、家族総出で押しかけ、狭いながらも家族でいただいたものでした。そんな中にも銭湯の小型版らしき感覚を得たものでした。

日本人は風呂が好きな民族なのでしょうか。銭湯離れが嘆かれる今日にあっても、郊外浴場とかスーパー銭湯とかは賑わっているようです。ましてや温泉の人気は相変わらずです。時代

左：格天井（澤乃湯：欅、湊湯：城山松）

下：欅の一枚梁（湊湯）

によって様々な風呂の好みや入り方はありますが、入浴が持つ効果はそれとして、入浴プラスαが銭湯にはあるのではないでしょうか。そのプラスαは、人それぞれで身につけていけばいいのでしょう。私が思うに、このプラスαは、人間を豊かにし、人を思いやる心を育み、そして優しさを与えてくれると思っています。宇出津びとは、今でもそうしたチャンスを身近に備えています。

私自身、家風呂がタイル貼であったとき、特に一番風呂は寒いし、冬期間だけ銭湯へ通った時期がありました。冬の銭湯は大変温まります。馴染みの浴客もでき、時には背中を流したり流されたりもしました。そして、風呂を

澤乃湯の脱衣所と煙突

終え脱衣場へ行く前に、黄色いケロリンの桶を片付ける人の姿を見て、私もいつしか桶を片付けることが身についていました。

さて、こんにちの銭湯は、ほとんどが常連客で占められているでしょう。

「この時間なら、○○さんがいるな」とか、「○○がいないのは、風邪でもひいたかな」と囁かれる銭湯に、皆さんも昔を思い出して足をはこんでみませんか。ひょっとして大きな探し物に出会うかもしれません！

今回の物語を書くにあたって、数馬公著「能州能登町物語一」を参考・一部引用させていただきました。

＊追

先日、現存する２軒の銭湯（澤乃湯・湊湯）を訪ねてきました。澤乃湯のペンキ絵は、５年前に酒垂神社氏子青年会のお世話により、同会員の上野実さんが、お旅所から望む北アルプスを描いたものでした。一方、湊湯の絵は、ありきたりだがといいながらも、やっぱり富士山を眺める絵でした。

また、湊湯の特徴は玄関にもあります。唐破風造りは見事な様です。東京の銭湯ではよく見かける造りですが、北陸では今では湊湯だけだそうです。

そして両湯とも建物も立派な造りで、天井は共に「格天井」で、澤乃湯は欅材、湊湯は城山松を使用しており、今でも立派な輝きを見せていました。いずれの銭湯とも、使用している部材が良質なので、今でもしっかりとしていたのが印象的でした。そして、土管を積み上げた両湯の高い煙突は、開業した当初そのままを覗わせるもので、宇出津の近代史を語るに欠かせない両銭湯。たまには懐かしさだけでも結構、下駄を鳴らしてとまではいかなくとも、浸かってきてみませんか。懐かしく良き時代に、タイムスリップできますよ。

「元気なうちは番台に上がりますよ」と堀川せつ子さん

（3）　宇出津に建つ像と碑（いしぶみ）

今回は、宇出津に建立されている像や碑を探ってみました。

像や碑というものは、その材質が石や金属などであり、ある事を記念することや、人の功績などを後世に伝えるために建てられたものがほとんどであり、碑は「いしぶみ」とも言われます。

さて、像といえば、遠島山公園内に建つ「益谷秀次」先生の像です。先生の経歴や功績については、先生が亡くなられた（昭和 48 年８月）後の、自民党葬での田中角栄葬儀委員長の弔辞文面から紹介させていただきます。

明治 21 年宇出津に生まれ、京都帝国大学（現京都大学）を卒業後、大正３年司法省に入り、各地で地裁判事を歴任され、大正９年の総選挙に政友会から出馬され初当選。以来、当選 14 回、35 年７ヵ月に亘り国会議員として在職。その間、外務政務次官をふりだしに、建設大臣、国務大臣、副総理など数々の要職を歴任され、昭和 30 年３月には衆議院議長に就任されました。また、先生にはエピソードが多く、判事時代には証拠不十分を理由に、多くの無罪判決を行ったため、無罪判事の異名をとるという有名な話もありました。また、政治生活は、きわめて清廉潔白であり、典型的な井戸塀政治家（選挙に自己の財産をつぎ込んで貧しくなり、井戸と塀しか残らない）で、生家は能登きっての資産家であったにもかかわらず、先祖伝来の資産は政治のためすっかり使い果たされたと紹介されています。

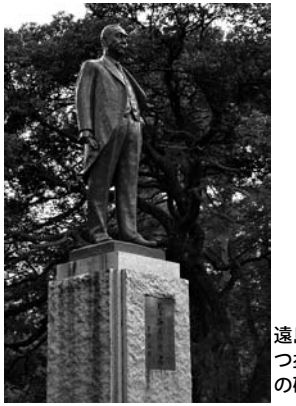
ところで先生は、その政治的半生を通して、郷土の発展にも尽力され、道路の開拓、河川の改修、漁港の整備など産業発展の基盤に大いなる力を注がれてきました。そして最も特筆すべきは、能登線の建設であります。先生が亡く

国会開会に昭和天皇を先導する益谷衆議院議長

能登線開通に立ち会う益谷

なられた後の取材に応えた松枝夫人の談で、「私が益谷のところに来て、益谷が一番嬉しかったのは、能登線が開通した時でした。益谷は昔から能登へ汽車を引きたいが口ぐせでした。とうとう列車が能登へ来た日、益谷はああいう性格の人ですから、嬉しさを顔や言葉には出しませんでしたが、永年つれ添ってきた私にはわかります。夢がかなえられて本当にうれしゅうございました」と。

昨今、政治家の政治資金の扱いについて、やたらマスコミを賑わしている報道を目にする度、益谷先生の爪の垢を飲ませたいと思うのは、決して私だけではないでしょう。郷土を愛し、郷土と日本のために資産を投げ打って、政治に生涯をかけられた先生に改めて敬服するものであります。



遠島山公園に建つ益谷像と顕彰の碑

遠島山公園の赤松林に囲まれた宇出津湾を望む場所に、能登が生んだこの偉大な政治家の功績を、後世に伝えようとモーニング姿で左手をズボンのポケットに入れた立像（高さ2.5 m）が、昭和34年11月に、そして同57年8月に顕彰之碑が建立されました。

最後に、益谷先生が故郷へ寄せた遺訓とも言うべき一文の一節と座右の銘を紹介します。

「祖国愛の出発は、隣人愛、郷土愛を基盤に育つものであるまいか。私たちの郷里は気候や経済発展には決して恵まれてはいないが、“能登はやさしや土までも”と言われる。純朴で人情が厚く、勤勉で辛苦に耐える誇りうる伝統を父祖から受け継いでいる。私はこのような美しい郷土に生を受けたことに、限りない喜びと感謝を忘れたことはない。在郷と他郷にあるを問わず、若い人々に、郷土再発見の目を大きく見開いてもらいたい」

座右の銘：「羅しく」

次に、宇出津港の南岸、崎山灯台のたもとの天保島地内に「宇出津漁業組合設立碑」が沖を臨む場所に建立されています。その中身は、組合創立者川端時太郎氏をたたえるものであります。

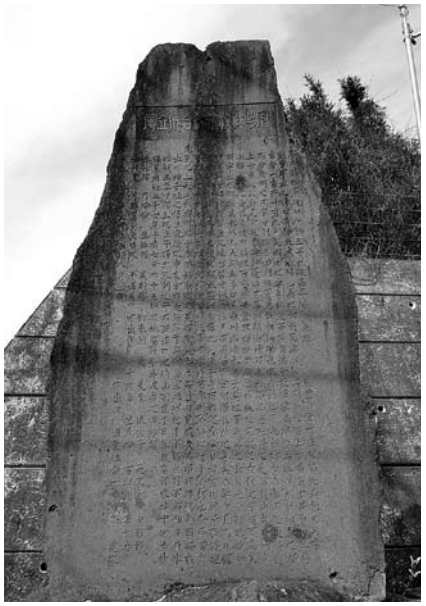
明治から大正の頃の漁民の生活は、けっして豊かなものではなかったようで、ましてや海上での仕事は命をかけた危険と隣り合わせのものです。そうした漁民の姿を見て時太郎は、一定の収入を得るには漁民による「市場」開設の必要性を説いてまわったのです。そして、漁業組合を作ることによって漁師の連帯感を強め、魚の販売は勿論、漁師の持っている知識や情報の相互のやり取りや、漁具を改良したりすることなど、ひいては漁師の暮らしの向上につながるものとの考えを日ごろから持っていました。

時太郎のこうした考え方に、漁師は勿論、網元にも理解され、助太刀を申し出る四十物問屋（加工業者）も現れました。

こうしてついに、大正5年、宇出津漁業組合が組織され、県内で初めての漁師による「魚市場」ができました。そして大正8年、石川県水産連合会から、その活動と成果は著しく、県内の模範であると称えられ銀杯が贈られ表彰されました。この受賞を喜んだ漁師たちによって、大正9年8月に碑が建立されたのです。

当時、建碑委員の一人であった人は後に、「川端時太郎氏は、世にも珍しい、私することを知らない徳の高い人でした。碑を個人名にしなかったのもそのためだった」と。そのため当時の人々は、

天保島に建つ「宇出津漁業組合設立碑」



この碑を「川端さんの碑」と呼んでいたのです。

今ある私たちの日々の暮らしも、わが郷土が誇る先人のお陰であると思うし、このような大先輩を送り出した宇出津の風土と文化に、さらなる愛着を感じる次第です。そして今を生きる私たちも、この宇出津の風土と文化をこよなく愛し、子や孫に伝えていく使命を強く感じるこの頃です。

このほか、遠島山公園内には諸角友平の歌碑が、上岩屋町には角力碑があります。前掲の2つと併せ、ご自身で足を運んでゆっくりと触れてみては如何でしょう。

［参考文献］能都町史第2巻、第5巻。数馬　公著「能州能登町物語3」

（４） 宇出津から眺める海越しの北アルプス

能登半島の内浦側、すなわち富山湾を臨む地域からは、立山連峰をはじめとする北アルプスの山々が眺められます。天候等の具合によって比較的はっきりと眺められる日は、一年に３０日程度あります。

これは、役場前の「いやさか広場」に立つモニュメント（ガラスに北アルプスの山々が描かれてある）を前に、能登を訪れた人たちに、私がよく言う説明であり、能登の人に今さら言うまでのことではありませんが、今回の物語に少しお時間をいただきたいと思います。

能登半島の付け根にあたる氷見から、七尾、穴水、能登、珠洲と、場所が変わることによって、北アルプスの姿も変わってきます。また、５月の雪解けの頃、万年雪が少し残る８月、たっぷり雪に覆われた１月と、季節によっても、そして、日の出の時間帯でのシルエット模様から、夕焼けで赤く染まる姿まで、３６５日、月日、時刻、そして天候によって同じ姿を現わすことがないであろう豊かな景観は、太古の昔から変わらぬ姿を映してきたことでしょう。

そして、能登の特に内浦域に居住する人々は、この景観に心のやすらぎを皆さん覚えるに違いありません。海越しに眺められるこの姿は、そうした人々を癒やしてきたのみならず、生活の中にも取り入れてきました。

漁師は、自然界を生活の場とするので、風の方向や雲の流れ・形などから、おおよその天候を経験から習得して、それが知恵となり、いわゆる天気諺となって伝え残されています。そのなかで立山に関係する諺をいくつか紹介しますと、

○立山が冴えた翌日は、天候が荒れる（雨が降る）。

○立山に雲がホーボク（法衣）をつければ、一時間以内に大時化になる。

宇出津港奥から眺めた北アルプス

○越中立山連峰、猛吹雪にて冴えて見えるあとに、南東の大時化があり、このあとに鰤の回遊がある。

○寒が過ぎ、立山が冴えて見える時には、鱈が浅上がりする。

などと伝え残っています。（能都町史第２巻より）

さて、富山県では、県民ならだれしも一度は立山（雄山）へ登るということを聞いたことがあります。私は立山へは８回登っていますが、必ずといっていいほど、園児や小学生の団体と出会います。富山県民には郷土の誇れる山として、幼いころからの立山登山が浸透しているのです。石川県の白山はというと、どうしても普段から見慣れているせいか、加賀と能登では山に対するイメージが異なってくると思います。能登ではやっぱり立山の方が故郷を彷彿させるのではないでしょうか。

宇出津から眺める北アルプスで、最も大きく眺められる山は白馬岳です。これは白馬岳までの距離（約 82 ｋｍ）が、他の山よりも近いため大きく見えるのです。宇出津湾奥から眺められるのは、東から白馬岳、旭岳、鑓ケ岳、唐松岳、五龍岳、牛首山、毛勝山、猫又山、剣岳、そして立山です。宇出津新港から眺めると、東は火打山や妙高の方から、西は薬師岳方面となりますが、最高に条件がよければ白山まで眺めることができます。水平線上のおよそ 150km 間の山々を眺められるということは、海越しでなければ眺められない景観です。そんな点も、能登のやさしい風土が培われてきた所以でありましょうか。

宇出津からは白馬岳が最も雄大に眺められる

写真中央が剣岳、右が立山

ところで、能登に住む多くの人たちは、対岸の山々を総称して「立山」と呼んでいます。実は、立山という単独の山はなく、雄山、大汝山、富士の折立の３峰を総称して立山と呼ばれています。また、立山三山とは、この立山と別山、浄土山のことをいい、立山連峰とは、この立山三山及びその周辺の山々（北は僧ヶ岳から南は黒部五郎岳）を指して言うようです。そして黒部川を挟んだ東側、すなわち白馬山系の方を後立山連峰（北は白鳥山から南は針ノ木岳）と呼びます。ですから、私たちが目にしている山は、実に多くの名前

を持った山々であるのです。

私自身も、ある小説を読むまでは、対岸の山々を「立山連峰」と総称して呼んでいました。そして、個々の山々に興味を持つようになりました。その小説は、昭和 50 年代に発行された、新田次郎著の「剣岳点の記」です。これは、事実に基づいて筆者が小説としたもので、７年前には映画化もされています。

明治 39 年、日本地図最後の空白地帯を埋めるという任務、すなわち剣岳の頂上に一等三角点を設置することで、未だかつてだれも登ったことのない山、「剣岳」の登頂とその測量という命令が、陸地測量部（陸軍）の測量官である柴崎芳太郎に下ったのです。度重なる困難の末、柴崎は、このだれも登ったことのない山への登頂を果たしました。しかし、その喜びもつかの間、頂上で錆びた鉄剣と銅製の錫杖を見つけたのです。鑑定の結果、奈良時代から平安初期に登頂したであろう修験者のものであるとされ、今は国の重要文化財に指定され、富山県立立山博物館に展示されています。

立山信仰では、剣岳は針の山として立山曼荼羅に描かれており、登れない山、登ってはいけない山とされています。

私は「剣岳点の記」を読んでから、立山信仰に興味を持ち、いつかは立山や剣岳に登ろうとの思いを強くし、10 数年前にようやくにして立山に、その後「剣岳」に登りました。　立山には、室堂・弥陀ヶ原・地獄谷という場所が、そして周りには、別山・浄土山・大日岳・薬師岳と言った仏教にゆかりある名前の山々が多くあります。

立山信仰の宿坊町として栄えた芦峅寺に立山博物館があります。立山開山からの歴史や、立山信仰そのものを、そして立山カルデラ（火山活動）を知るうえにおいては大変素晴らしい博物館です。私たちと深いかかわりをもってきた立山のことを、少しでも理解を深めることも大切なことかなと思います。立山のことをもっともっと知ったうえで眺めてみると、３６５分の３０が一層待ち遠しく、そして、さらに能登に住んでいてよかったと感じるようになるかもしれません!

ちなみに、北アルプスが明瞭に眺められるのは、海上の空気が乾いているとき、すなわちフェーン現象（日本海に大きな低気圧が近づき、山越の南風が吹いている）の時は必ずと言っていいほど眺められます。そして、その翌日は必ず雨が降りますので、傘をお忘れなく。

今は撤去された間島鉄橋越しの剣・立山

（５）　宇出津小学校から巣立った宇出津びと

宇出津小学校の前進である最初の学校が設けられたのは、明治５年 (1872) ４月であります。その当時の校名は、「七尾県能登国第 14 区宇出津村区学校」という名前で、長楽寺や、田町にあった給人蔵（知行米を預かる蔵で、現在の小学校の位置にあったとされる）を借りて教育したと伝え残っています。実に、本年で 144 年目を迎えたことになります。その間、校名は行政区域の変遷や、教育制度の改編等により、現在まで 26 回も変わってきております。全てを列記できませんが、主だった校名を紹介すると、

●明治 10 年６月　第２大学区第 25 中学区石川県第６大区宇出津村順天小学校（女子は貞操小学校）

●明治 18 年 10 月　石川県能登国鳳至郡４番学区町村立男児 (女児) 小学校

●明治 34 年４月　石川県鳳至郡宇出津尋常高等小学校

●昭和 16 年４月　石川県鳳至郡宇出津国民学校

●昭和 22 年４月　石川県鳳至郡宇出津町立宇出津小学校

●昭和 30 年３月　石川県鳳至郡能都町立宇出津小学校

●平成 17 年３月　石川県鳳珠郡能登町立宇出津小学校

二宮金次郎像と
金次郎像の設置式
（昭和 17 年）

そして、間借りしていた校舎も、明治９年には現在地に校舎が新築されたのですが、同 32 年に事務室から出火し、一棟を焼失した記録が残っています。その後、同 40 年に再度校舎が新築されましたが、昭和 10 年に全校舎焼失の災難に遭っております。そして同 12 年に再度校舎を新築し、同 17 年には二宮金次郎像が設置されています。

戦後の学校周辺の動きとして、33 年に藤波へ通じる国道の隧道が完成し、

34 年には学校敷地内に「母と子の家」が完成、35 年には国鉄能登線が宇出津まで開通、この年から学校給食が始まっています。45 年には、国道の下を通る通学用の地下道も完成しております。

そして昭和 51 年 7 月、木造校舎を建て替えての現在の新校舎の落成式が行われ、併せて前年に結成された「宇出津小学校育成会」による記念事業が執行され、学校の教育環境の充実が図られるとともに、「宇出津小学校百年のあゆみ」が刊行されています。

ここまでの学校の歴史の中で、昭和 10 年の校舎全焼と、戦時下における学校の様子を少し紹介してみたいと思います。

「宇出津小学校百年のあゆみ」（以下「百年のあゆみ」）によると、当時の新聞記事から、「6 月 28 日午後 8 時 30 分ごろ、宇出津小学校小使室より出火し、火の手早く、見る見るうちに同校を猛火のうちに包み、後方山林に延焼したのを、当日宿直の訓導が発見し、驚いて飛び起き、直に御真影を白山神社に奉遷するとともに急を報じたので、消防組駆けつけ、消火に努めた結果、校舎及び新旧両講堂、奉安庫、児童控所、分教室 26、特別教室 6 を全焼して、10 時 30 分ごろ鎮火した。何分にも火の手早かったため、校具類は一切取り出す暇なく全部焼失し、重要書類は一部を焼いたのみで無事だった。損害約

運動会の様子（昭和 20 年代）

昭和 12 年に建設された校舎（昭和 30 年代）

敷地内に「母と子の家」が

20 万円で、焼失坪数 1,200 坪に上る見込みである」と報じています。

焼けた後は、町内の各寺院に分かれて授業が行われていたものの、文字通り「寺子屋」教育の復活だったようです。子どもたちをいつまでも仮住まいさせるわけにはいかないと、新校舎建設の気運が当然の如く高まり、宇出津町当局は設計を急ぎ、住民や町出身者は寄附等をつのり、多くの浄財が集まり、昭和 12 年 11 月に、新校舎の落成をみたのであります。

次に、戦時下における学校を紹介します。昭和 13 年、県下各校で、できるだけ学業に支障がないように、日曜や休暇を勤労作業に充てるという目的で「少年勤労報国隊」が結成されております。戦争が新たな局面を迎えると共に、学校は非常戦時体制へ転じてゆき、勤労作業が即教育となっていきました。17 年以降の宇出津国民学校の作業日誌（「百年のあゆみ」）から主なものを見てみると、

・17 年 10 月　ドングリ拾い。
　11 月　高等科児童　山林の下刈り
・18 年 1 月　高等科児童　木炭搬出
　5 月　学校林下刈り、薪木五束あて町内遺家族家庭へ。
　8 月　肥料増産学徒動員により、4 年以上草刈り
・19 年 3 月　女子勤労挺身隊結成
　4 月　植林作業
　5 月　6 年以上、源平より木炭・材木搬出勤労作業
　11 月　5 年以上、四明山開墾作業はじめる

ドングリはアルコールをとるため、桑の皮や野生チョマは軍服の繊維に、防寒服の材料にススキの穂の採集や、各家庭を巡り金属の回収を行うなどもあったそうです。また、小学校の運動場はすべて掘り起こされ、大豆、ジャガイモ、サツマイモ、きび、野菜が栽培されるという時代でした。

この頃の全児童数は、1,200 人台で推移していたのですが、19 年には 1,400 人、20 年には 1,550 人と増え、宇出津町は集団疎開の受け入れ先ではないとはいえ、東京や大阪からの疎開児童による増加がありました。

さて、明治 5 年から今までに約 2 万人の卒業生を送り出しています。明治期の就学率は今と比べると低く、授業料を徴収していた時期もありました。また、制度の変遷や戦争の影響もあり、現在のような 9 年制の義務教育となったのは、戦後（昭和 22 年）の学校教育法が公布されてからで、この年度から現宇出津小学校の卒業証書の番号が現在まで連番で続いています。

団塊の世代と呼ばれる、昭和 20 年代初めころに生まれた世代が通う頃には、宇出津小学校全児童数も 1,500 人台でした。これをピークに昭和 36 年の児童数は、1,341 人。同 60 年には 642 人。これが平成 10 年には 379 人。そして現在は 216 人と、少子化問題を

低学年の授業の様子（昭和 30 年代）

表す数となっています。こうして宇出津小学校から巣立った約２万人の卒業生の中には、政治の道で、あるいは経済界・学術分野・医療関係・自営・農林漁業・会社員・公務員、嫁がれて他の地へ行かれた方など、各界・各分野で頑張った人、頑張っている人をたくさん輩出してきました。宇出津小学校を卒業した人のほとんどは、学び舎であったそれぞれの教室や、音楽室、長い廊下、下駄箱、便所、講堂、あるいは体育館やプールなど、当時の様子や出来事などを鮮明に思い出せるのではないでしょうか。

校舎の姿・形は変わろうとも、そこで生きていた時代は、それぞれの記憶の中に残っていると思います。地域における小学校の位置づけは本当に大きく、地域のコミュニティーの中心となる場所であり、そして何よりも多くの「宇出津びと」を育ててきたのが宇出津小学校なのです。

よく走った長い廊下

今、宇出津の街なかを散策してみると、空き家はもとより、家を解体して空き地となった所が目立つようになってきています。そうした家の多くは、生活の拠点を他の地域に求め、あるいは求めざるを得なかったのでしょう。これは仕方の無い事かもしれませんが、小学校時代を過ごした友達と遊びほうけた、楽しかった宇出津のことを、自分の子や孫たちには、必ず伝えていってほしいと思います。そして、たまには思い出深い宇出津に足を運んでみては如何でしょうか。

宇出津には「あばれ祭り」だけでなく、心温まる思い出がいっぱいあるでしょうし、なによりも「こんじょよし」の宇出津びとが今でもたくさんいますから。ねっ！「宇出津びと」さん。

＊宇出津小学校校歌

作詞：今井松雄　作曲：鵠巣盛広

「城山緑　したたりて
波静かなる　宇出津湾
にぎわう出船　入船に
運ぶ海幸　山の幸」

（昭和 16 年７月８日制定）

（6）　宇出津びとになりきった、ベックマン一家

昭和 30 年 11 月、アメリカから若い夫婦と、幼い女の子２人と男の子１人の５人家族が、初めてやってきた宇出津の地にバスから降りました。彼らは能登にキリスト教を布教するためにやってきたベックマン一家です。宣教師の夫はディヴィット、妻日出子、長女ヨバーン（４歳）、長男ダニエル（３歳）、次女ナオミ（１歳）。棚木にあった萱葺き一軒家が、日本での初めての生活拠点となりました。

ベックマン一家が日本で初めて迎える冬は、大雪の年でもあり、囲炉裏とこたつで暖をとることしかできなかった一家には、幼子３人を抱え、大変であったろうと察します。ところが、意外や意外、一家はすぐに近所の人たちとも溶け合い、野菜や魚をわけてもらったり、３人の子どもたちも近所の子らといち早く友達になり、不慣れな日本語のみならず、方言の宇出津弁もなんのことなく、日常生活に慣れていったのです。

ベックマン一家は、昭和 30 年から 39 年までの９年間、宇出津に自宅兼用の教会を開き、宇出津を中心として、小木・松波方面、柳田、鵜川方面などで布教活動をされていました。この９年の間、アメリカに住む日出子さんの父母に宛てた手紙と、宣教師である夫ディヴィットが撮影した写真を合わせて、平

宇出津に溶け込んだ一家５人

囲炉裏を囲んで布教するデヴィット

日曜学校に通う面々と

成21年に「能登便り」として記録誌を発行されました。この「能登便り」の冒頭に、日出子さんは次のように記されています。

「半世紀前の能登の風景・季節の移り変わり。半島に生きる人々の姿、人情、しきたり。その中に育つ異国生まれの子ども達。在日、昭和30年代の9年間。アメリカに住む日本生まれの祖父母に宛てた母親の手紙の中と、父親のカメラにとらえたイメージを懐かしみながらまとめてみました」文中の祖父母は、日出子さんの父母であり、子ども達からみた表現となっています。

日出子さんは、子どもたちの様子などを実にこまめにアメリカへ便りをしており、そして、ディヴィットが撮影した写真の数々は、当時の能登（特に宇出津）の年中行事や風俗、産業などを知る上において、驚くほど資料的価値の高いものが豊富にあります。

ベックマン・ナオミ（現：福井ナオミ）さんが母親の日出子さんと、平成21年11月に能登町役場にて、刊行した「能登便り」の報告と寄贈に町長を訪ねて来られました。後にこのことを知った私は、ナオミさんと同級生だったので、何とか連絡を取りたいと思っていたところ、平成25年にディヴィットの撮影した全フィルムのデータ化の処理が終了したので、これを町に寄贈したい旨の連絡が町当局にあり、同級生のよしみで私がナオミさんとの窓口となりました。彼女は、日本人と結婚し、群馬県前橋市に在住でした。膨大な量の貴重な、そして資料的価値の高い写真を、広く住民の皆さんにも見ていただこうと写真展を企画し、26年6月から7月、あばれ祭りの前後2週間、新しくできた宇出津公民館にて開催することとしました。寄贈していただいた写真は、中央図書館にその一部を閲覧できるようにしてあり、希望者には実費でプリント配布ができるようにもなっています。

ベックマン氏から寄贈された写真は1,350点にも及びます。そして、宣教師ベックマンが観た「能登の人・風土・生活」と題打って270点を展示し、能登回顧写真展を開催しました。2週間の期間中2,600人の来場者があり、ベックマン夫妻と親しかった人々や、ヨバーン、ダニエル、ナオミ等の同級生もたくさん会場を訪れていました。年代的には60歳以上の人たちが懐かしく見入り、今は亡き人が写っている写真を見て涙する人もあり、自分の母親が写っているとか、同級生が写っているとか、懐かしい中にも賑やかな写真展でありました。当初は一家の5人が「あばれ祭り」にあわせて来町する予定でしたが、高齢の夫妻以外の3姉弟がそれぞれ家族や友人を伴って訪れました。写真展の会場を訪れた人の感想を次に紹介します。

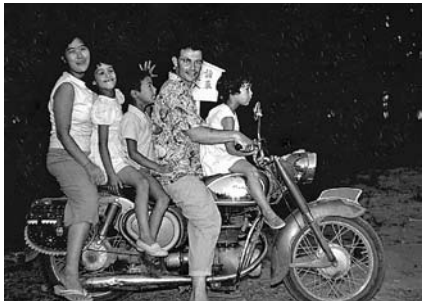
●懐かしく、なにか心が洗われるような気がしました。子どもたち、大人たち、人がたくさんいることの素晴らしさ。貧しくても心の豊かさの大事さを訴えているようでした。ありがとうございました。

●私はダニエルさんと机を並べた同級生です。懐かしさでいっぱいです。昔の皆さんは一生懸命頑張っていたのだと、つくづく思いました。

●50年前の子ども時代を思い出し、とても懐かしかったです。今にはない笑顔、生活、暮らしぶり、心の豊かさ、素朴さ、たくましさ。感激しました。元気をもらいました。

ところで、ベックマン一家のなかでもディヴィットは、本当に地域の人々の中に溶け込んでいたようです。そのことは撮影された写真を見ていてもわかります。ある家で行われた結婚式では、家に入る時から、玄関先での水杯を割って中に入り、神様棚と仏壇を参り、三々九度の杯から宴会料理までの一連の記

地域の人と、素潜り漁を



愛用のバイクで

日本の生活・風習をしっかりと身に着けました

録として、あるいは、近所のお婆さんが病床に伏せている生前の姿から、息を引き取り棺桶に収まり、お寺へ運ばれ葬儀を行い、火葬場までの記録があるかと思えば、年中行事や布教活動、子どもたちの成長の記録、農業・漁業・林業・商工業などの働く人間の姿が多くあり、自分でも友人と素潜りでサザエを採っている写真など、実に多彩な写真があります。

日出子さんが自費出版した「能登便り」と、ディヴィットが撮影した写真は、中央図書館で閲覧できます。実際に手に取ってみていただくことが、昭和30年代の「宇出津びと」＝ベックマンを偲ぶことが最もできると思います。半世紀前の人々の生活は、今と比較すると大変不便なように見受けられます。しかし、その時代に生きている人々の姿は、みな一生懸命な姿であるようにも見えます。戦後間もない日本を支え、高度経済成長への礎の時代を生き抜いてきた人々の姿が見られます。まさにそこには「宇出津びと」がたくさん写っているのです。

そして、ベックマン一家は、能登での９年間で立派な「宇出津びと」となってアメリカへ帰りました。日出子さんは、３人の子どもたちが日本での布教を終えてアメリカに帰る日のことを思い、ある信念を持って来日したそうです。その信念とは、「日本へ行ったら、子どもたちが英語を忘れないように、ちゃんと家での会話に使い、また教えること。これから覚える日本語は、きれいな標準語であるべきだ」ということだったそうです。ところが、宇出津に着いたとたん、「よそ者であり、日本人らしくないこの子たちが、一刻も早く受け入れてもらい、友達をつくり仲良く溶け込んで暮らすには、すべてのバリアーを取り除き、土地の人となるべきことが必要だった」と語っていました。土地の人となるべきこと、すなわち「宇出津びと」となって帰途についたのでした。

アメリカへの帰途に就く（昭和 39 年）

現在、ナオミさん以外は皆アメリカに在住しています。宇出津びとの居住範囲も広くなりました。写真展に来日したヨバーン、ダニエルそしてナオミさんは、自分の子どもらも連れてきていました。宇出津びとの故郷を見せたかったのでしょう。またいつか宇出津で会える時を楽しみにしています。

“Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ．”

（7）　宇出津びとが好んできたグルメ

宇出津は天然の良港を擁し、また沖合での定置網漁業等が盛んであり、季節ごとに獲れる魚介類が豊富な地域であります。

近代に入って冷蔵・冷凍技術が進み、また道路網の整備にあわせ輸送手段も敏速になり、鮮魚を他地域へ速やかに送り届けることが可能な時代となりました。それまでは、大量に漁獲された鮮魚等は、塩干類や、なれずしなどの保存がきく品に加工されるほかない時代でありました。

塩蔵品、塩干し品などに混じって、加工する際の副産物を使った、地域独自の珍しい加工品があり、今でも郷土宇出津の逸品として愛好されています。

そこで、宇出津びとであればこそ食すことができる、珍味・グルメの品々を紹介してみましょう。

●鯨のユデモノ

鯨の皮や、内臓である小腸・心臓・腎臓・肝臓で、これらをよく洗って、血液・汚物を除き、煮て輪切りとし、酢味噌に浸して食します。

●イカのユデモノ

茹でイカ加工の際に副産する内臓（卵巣、精巣を含む）を、茹でイカの子として酢味噌の調味料に浸して食します。

●メガラス

スルメを加工する際に副産される嘴で、塩水で洗って煮たり焼いたりして食します。

●マグロの臓物

夏、大物のマグロの内臓から得られる卵巣を「真子」といい、精巣を「白子」、胃を「フトウ」、心臓を「ドモコ」、腸を「ホソクリ」と称し、よく洗浄して煮て、それらを薄く切り、酢・味噌の調味料に浸して食します。

●タラの子

マダラを原料として干鱈・塩鱈加工の際に副産される卵巣で、塩漬けして蓄え、または醤油・砂糖・みりんに味付けして、鱈の刺身にまぶし、親子漬け（コツケ）として食します。

●イシリ

スルメイカを加工する際に副産されるワタ（内臓）に、多量の塩を混ぜ、桶に入れ、翌年の夏ころまで放置し、この間に自然に発酵させて得たアミノ酸醤油です。刺身・焼き魚・鍋物の調味料として使用します。イシリを採った残り粕を「サイ」と呼び、この粕とナス・キュウリ・大根などを混ぜて漬物にしたのが「ベン漬け」です。

●イワシの卵の花漬け

中・小羽イワシの頭部・内臓を除き、更に腹部より開いて背骨を除き水洗い、水晒し、水切りのあと、一夜軽いふり塩で肉をしめ、食酢内に半日程度漬けます。次に卵の花に砂糖、塩を混ぜて、かり煎を行い、冷えてからイワシの腹内に詰め、容器内に並べその上にニンジン・柚子・山椒を載せ、これを何段にも積み重ねて最後に重石を載せて漬けます。

●アジのヒネズシ（アジのスス）

春先に獲れた脂肪の少ない小アジ（10cm 程度）がよく、内臓を除いて水洗いし、約 15％のはり塩で、普通の桶に塩漬けを行う。こうして漬けこみ中に浮上する塩水が濁れば桶を傾けて液汁を流し、予め作っておいた濃い塩水を注加する。浮上する塩水が透明になるまでこの方法を繰り返します。次に別のスシ桶に笹の葉を敷き、こわめに炊いたご飯をしいて、塩漬けしたアジを並べ、手に酢をぬらして並べたアジをたたくようにして、その上に飯・山椒・唐辛子を上載せし、これを繰り返して最後に笹の葉を載せて押し蓋をして充分に発酵してできあがりです。

大量に獲れると干物に（昭和 30 年代）

●イワシの糠漬け（コンカイワシ）

大羽イワシを用い、頭部と内臓をとり、30％以上の塩で漬け込み、一週間以上漬けます。次に糠漬けは、樽の底に米糠を薄く散布して、先に漬けた塩イワシを並べ、一段ごとに糠・麹・唐辛子を散らし、これを繰り返して桶の上部まで漬け込み、最後にわらで三つ編みに編んだわらひもで樽の内避に沿ってあて、蓋をして重石をのせ、更に塩汁を樽の上部まで注ぎ貯蔵します。熟成は梅雨期や土用の暑い時期に行われるので、この時期を過ぎて食べごろとなります。

［以上、能都町史第１巻・２巻から引用］

宇出津では四季に応じて多くの種類の鮮魚等が多く水揚げされます。新鮮なものをいただくということでは、宇出津びとは大変恵まれています。ところが、新鮮以外にもこのような珍味やグルメを味わえるということも、真に「宇出津びと」ならではでないでしょうか。先人の生活の知恵が凝縮された珍味や保存食は、単に食欲をそそるだけでなく、食通や酒好きにはもってこいの逸品なのです。

そして鯨やマグロの内臓を使ったものは、獲れる数も限られ、獲れた時にしか手に入らず、それも一般には手に入りにくい品であるので、漁師の家か料理屋さんでいただけるものとなっています。

鯨は骨までゼラチンとして使うことができるように、能登の人々は獲れた魚は身から内臓まで、うまく調理する手立てを心得ています。大量に獲れたものは永い年月の間にそれなりの保存方法を確立し、発酵文化も築き上げ、今日私たちが口にすることができる珍味や保存食があり、改めて先人の知恵に感謝するものであります。

そういえば私の幼い頃、港で遊んでいた時に、煮干しがたくさん干してあり、お腹が空いておやつ代わりに、よくつまみ喰いしたのを思い出します。あるいは、夏の時期、魚屋さんの前を通ると、「いしりできました」の貼り紙をよく目にしました。これらもまた宇出津の風物なのですね。

こうして宇出津びとは、鮮魚や保存食、そして珍味や逸品を極々当たり前のように、日々の暮らしの中に受け入れているのです。他所の人から見ると、なんと贅沢な人びとであろうか。ただ、こうした保存食や珍味は、最近の若い人たちの口には合わないのでは・・・と思うことがあります。ところが実は、若い人たちの周りに、これらを作る人が少なくなったからではないかと思います。保存食や副産物を使った調理をする人そのものが少なくなったからではないでしょうか。

これらの作り方などを、私たちは若い世代に確実に伝授していかなければならないと思います。そして、これは宇出津びとの使命でもあります。

こうした海からの恵みをいただける私たちは、宇出津びとであることに、もっともっと感謝し、そして誇りを持とうではありませんか。ねっ！「宇出津びと」さん。

定置網に掛かっていた鯨を解体する様子

ドウブネで市場へ、人力のみで荷揚げしている様子（昭和 30 年代）

かつての荷さばき場の様子（昭和 30 年代）

（8）　宇出津びとがお世話になっている壇那寺

現在、宇出津には寺院が８カ寺あります。その内訳は、真言宗が２カ寺、浄土宗が１カ寺、真宗が２カ寺、曹洞宗が２カ寺、そして日蓮宗が１カ寺で、いずれも宇出津湾を囲むようにして位置しています。

今日ではほとんどの家が檀那寺を持っていますが、元をたどれば江戸時代の宗教統制政策、すなわち「寺請制度」がその始まりとされています。これは、年１回の調査あるいは申告によって、それぞれの檀家の人々の年齢・性別・宗門などを記した「宗門人別改帳」を作成することとなっていたのです。キリシタンでないことを寺院に証明させるため、個人は必ず１つの寺に管理されるようになり、併せてその寺に先祖の墓を管理してもらいながら、経済的にも支援していくということになったのです。

７月の宇出津の風物詩となっている
「灯籠流し」

寺院は檀家に対して、自分の檀家であることを証明するために「寺請証文」を発行しました。この寺請証文は、人々が奉公や結婚などで他の土地に移る場合には、移転先の新たな檀那寺に送付されたので、そんな意味では現代版の戸籍の役割も担っていたといえます。

さて、宇出津に所在する８つの寺を次に紹介してみましょう。

○金龍山　覚照寺（真宗大谷派：現住職　岡川秀映）［敬称略］
○光明山　天徳寺（浄土宗：水元栄運）
○大樹山　常椿寺（曹洞宗：室峰文行）
○白鷹山　長楽寺（真言宗：佐伯裕幸）
○鳳明山　因念寺（真宗大谷派：藤巻隆恵）
○熊野山　塩谷寺（真言宗：別宗靖憲）
○法立山　大乗寺（日蓮宗：井前本隆）
○龍穏山　海前寺（曹洞宗：斎藤好文）

かつては、寺の境内や鐘撞き堂は、子どもらの格好の遊び場の一つでありました。おにごっこ、かくれんぼ、チャンバラごっこ、ポコペン、８の字、ケンケンパ、だるまさんが転んだ等々、多くの人々の記憶に残る遊びの数々が思い浮かんでくることでしょう。あるいは、悪戯の度が過ぎて、強面の住職に叱られた童子もたくさんいたのではないでしょうか。そうしたなかにも、子どもらの世界における規律なり、約束ごとなどが自然と養われたもので、大人の世界への通過点的な場所であったのではないでしょうか。

また、それぞれの寺院には一年を通していろんな行事があります。お寺の行事というと「御講」を即座に思い出します。幼い頃、お婆に連れられて行った記憶がよみがえります。子どもにとっては肉や魚があると思って行くが、ご膳に盛り付けてあるのは、煮しめや煮豆、くずきり、漬物、ご飯と吸い物といった料理で、がっかりしたことを思い出します。それでも腹いっぱい食べて帰ったものでした。

これらの御講は、寺院によって様々ですが、おおよそ初御講（もち御講）、本尊講、彼岸中日、報恩講、ねはん会、終い講などであります。

ほかには、星祭り、大海供養会、観音祭、七面祭など、各寺院独自の行事も多くあり、この狭い宇出津に位置する８カ寺が行う行事は、一年を通じて人々の活動に賑わいをもたらせてくれてもいます。

そして、こられの御講や行事は、寺院の檀徒だけが参加するというものでないのも、驚く嬉しい事です。特に、「ねはん会」（だんご撒き）、「大海供養会」（灯籠流し）、「星祭り」などが多くの宇出津びとを集めています。

また、寺院には特定の人たちの集まる場所もあります。因念寺の太子堂は、大工さんたちが集まって太子講をつとめ

海前寺鐘撞き堂の建て替えを祝う様子（昭和 30 年代）

る場所ですし、大乗寺の稲荷堂は、かつては遊郭（免許地）のお守りという性格が強く、信者が多かったと聞いています。

そして、檀家にとって寺院での行事で最たるものはというと葬儀であります。お通夜から葬儀までの間、本堂・食事（仮眠）部屋・炊事場など、寺院内で全てが行われ、それを仕切る町内会の助けにより、相互扶助が行われて死者をお送りしたものです。寺院を使っての葬儀には、祭壇を飾ることから始まるので、区長町会長会が所有する祭壇を借りて組み立てていました。

ところが、20 数年前に、町が整備した斎場と、併設した多目的ホール（セレモニーホール）ができてからは、寺院で行われてきた葬儀が、徐々にこちらにとって代わるようになりました。

夏の暑い時期は蚊に刺され、冬は障子戸のすきま風をこらえての寺院での葬儀が、遠い昔のことのように思われます。こうして寺院へ足を運ぶことが減ってくると、子どものころ境内で遊んだことが、大変懐かしく思えてきます。お寺にはそれぞれの顔があると思います。ご本尊は大切な顔ですが、山門であったり、本堂・庫裏・鐘楼、お寺によっては○○堂など、そして周囲を飾る自然も立派な顔だと思います。

そうしたなか、どの寺院もたいてい中庭があります。住職がふだんおいでる部屋からの眺めが最も良いはずです。たまにはご自身の檀那寺を、「中庭を見たくなった」と訪ねるのもよいかと思います。歓迎していただけると思います。そして次には他のお寺さんを訪ねるのです。中庭もさることながら、個々の寺院には皆さんに紹介したい宝物や、誇れるものなどがきっとあると思います。濃い目の美味しいお茶をいただきながら、お話し好きの住職と語り、至福の時間を持てれば、さぞかし心も洗われることでしょう。

（マッターホルン）

丸木位里画伯が描いた襖絵
（松竹梅：常椿寺）

私は先日、「おぼく鐘撞く」とかつては詠われたお寺を訪ね、一服いただいてきました。というより、本当は丸木位里さんが書かれた襖絵を見たくなり足を運んだのです。どうして丸木夫妻が宇出津へ来られたのか、そのあたりのお話も聞きたくて、庭を眺める部屋にてお伺いしてきました。庭の紅葉が、小春日和にいっそう映える温かい日でした。

突然の訪問に相手をしていただいたお礼を言って辞去し、石段を降りながら、「宇出津びとを育ててくれてありがとう。そして、これからも宇出津びとをよろしくお願いします」と心の中で呟いていました。

＊追

丸木夫妻がどうして常椿寺の襖に絵を描いていかれたのか、最も肝心なところを述べておかなければ、読者の皆さんもすっきりしないことでしょう。

昭和 52 年（1977）、常椿寺の大フジ（夫婦フジ：県指定天然記念物）を見に訪ねて来られました。当時の住職夫妻が応対されました。住職夫妻の飾らぬ対応に心が和まれたのか、泊まっていかれることとなり、手作りの料理と普段の生活のままでの「もてなし」を受け、夫妻は 2 階の居室に床をとられ休まれたのでした。ところが、未明から起きている気配がするので行ってみると、 4 枚の襖の表裏に松竹梅を描いておられたのでした。位里 77 歳、俊 65 歳の時でした。

それから 10 年ばかり、ほぼ毎年のように寺に来られるようになりました。滞在中は能登各地を周りスケッチするなど、能登の風景を訪ね創作されていたようです。ご夫妻が休まれる 2 階の居室からは、街並みの屋根瓦と宇出津湾が眺められ、対岸の遠島山公園といい、夫妻にとっては心安らぐ眺めであったのでしょう。

なお、松竹梅の画のほかにも、襖等に描かれた画が数点ありますが、昭和 63 年に描かれた未完の作を紹介しておきましょう。28 年の歳月を感じさせてくれます。

丸木俊画伯が描いた襖絵
（住職夫妻：常椿寺）

（9） 賑わっていた宇出津を尋ねて

暮れも押し迫ると、サラリーマンにとっては、嬉しいのかがっかりするのか、「年末調整」という手続きがあります。今でこそ「特別徴収」という制度でもって、税金は給料から天引きされるので、税を納めたという意識は薄らいでいるかなと思われます。この特別徴収であれば、その徴収率は100％であり、なおかつ課税側にとっては、事務等の労力の軽減にもなります。

さて、それでは江戸時代はどのようにしてお百姓さんから「税」を徴収していたのでしょう。加賀藩では、年貢の取り立ては藩の役人が行うのではなく、村の有力者である「肝煎」（他では庄屋）に任せる形をとっていました。また、年貢の収納は、村単位で納めるため村全体の連帯責任を負うこととなるので、不作年以外の年貢の完納率は良かったであろうと想像されます。

それでは年貢はどのようにして定められたのでしょう。それは「検地」の実施に基づいて作成された検地帳を基本とし、面積から算定した標準的な収穫高を定め、併せて毎年の作柄を検分したり、過去数年間の平均収穫量を基本とするなどして調整されていたようです。

また、年貢には田・畑・屋敷地に対して賦課される物成と、山林原野や河川沼沢などの用益や産物などに対して賦課される小物成で、自然物から農林水産物・商工業やその他のサービス等に課せられたものに分けられていました。そして、加賀藩から各村々へ年貢の取り決め書、すなわちその村の標準的な収穫高と、年貢の率などを書面に記し、藩主の印を押して交付した文書で、印（御印）が押されていることから「村御印」と呼ばれ、代々大切に保管されてきました。寛文10年（1670）に加賀藩領内の3,411の村へ発布された「村御印」が最も多く現存しています。

そこで寛文10年の宇出津町の村御印から主な部分のみを次に抜き出したので、当時の宇出津町を連想してみましょう。

能州鳳至郡宇出津町物成之事

壱ケ所草高　五百四拾石　免八ツ三歩

同町小物成之事

一、三百三匁　山役

一、二拾匁　鍛冶役

一、弐貫百五拾七匁五分　外海舟櫂役猟舟櫂役

一、五百四拾三匁七分　網役

一、三百六拾五匁　釣役

一、弐百四拾五匁　鱈役烏賊役

一、七拾五匁　室役紺屋役

一、百九匁六分　間役

一、五匁　漆役蠟役

一、八百六拾四匁　地子銀新町分

右小物成之分、十村見図之上ニ而指引於有之者、其通可出者也

寛文十年　九月七日（印）宇出津町百姓中

さて、ここからわかることは、宇出津町では540石の収量があり、税率は83％という高い率です。高いということは、農業以外の生産活動が盛んであり、これら他の産業も勘案されたと思われます。

小物成では、山役は山から木を伐採することに掛かり、鍛冶役は近郷からの農機具等を担う鍛冶に対するもの、外海舟櫂役は海の交易に掛かるもので、これに対して猟舟櫂役・網役・釣役・鱈役烏賊役は漁業に掛かるものです。また室役は麹屋、紺屋役は染物屋、間役は湊に掛るもの、漆役蠟役は漆及び蝋燭屋と思われます。そして、地子銀とは土地に対する税で、宇出津新町分の地子銀を宇出津町が一緒に納めていたことなどがわかります。

加賀藩が行う宇出津宛ての年貢の取り立ては、「村御印」からわかりますが、

宇出津山分村では、税率は46％、小物成は3種類しかない

当時の宇出津の街なかの賑わいを知るうえで、江戸中期に書かれた「能登名跡志」があり、宇出津のことが次のように書かれています。

「此宇出津は本町・新町・新村つづきありて、其支配違へ共みな宇出津と云へり。三町にて家数四百軒余あり。（中略）次第に繁昌して国中一の四十物所にて、毎年春鯨など取り大猟至極の地也。其外諸商人あり。間には数百艘不絶。問屋の座敷には数百の旅人不絶。不断に市をなし、夏冬共ににぎわしきこと国府にも増れり」とあり、多くの商人が滞在して商売に励む湊の町として繁栄していたことが窺えます。

さらに詳しい様子を探るに、文化3年（1806）の宇出津の「村鑑」によると、蔵宿1軒、天秤座1軒、商売家127軒、うち商売家として、質屋・酒造・味噌・醤油・酢・油・米批売・古手・塩小売・蝋燭・菓子・たはこや・小間物・室・四十物・薬種・紺屋・豆腐があげられ、また、職人として鍛冶1軒、大工19人、猟師3人、壁塗1人、畳刺2人、石切2人があげられ、他に稼ぎとして、船問屋・猟（漁業）・素麺・旅人家・日雇・賃取が記されています。すなわち、宇出津には日常生活に必要なものはほとんどそろっており、宇出津は勿論、広く近郷の人々が日常生活品を買い求めにやってくる地でもあったのです。

また、安政5年（1858）の「宇出

津町村高等相調理書上申帳」によれば、前年の安政４年に入津した船は約 150 艘、他国へ出た船も約 150 艘で、両方合計すればほぼ毎日１艘宛の入出津があったことが窺えます。そして、他国からは次のような品々が宇出津に入ってきた記録があります。

・大阪　生蠟、玉砂糖、白砂糖、織草、線香、砥石、綿
・下関　生姜、塩鮪・筑前　瀬戸物
・阿波　藍玉・敦賀　石灰
・越前　麩糊・越後　米、小麦、大豆
・松前　昆布、鯡、数子

これに対して宇出津からは材木についてのみの記述があるだけなので、ほかの資料を調べてみると、材木のほか諸魚四十物類、屎物（肥料）干鰯類や炭が多かったことがわかっています。

こうして宇出津には全国から必要な品々が集まり、また、それらを買い求めて近郷から人が集まってきます。近郷の人々は、宇出津へは空身では行かず、炭や縄等を背にして問屋に納めて駄賃をもらい、それで必要な品を買い物する。商店の方でも年に数回は近郷の村々を廻って注文を受けて、得意先と顔つなぎをするのが慣例であったようです。そして、この時代の売買には多くのやり取りがあり賑やかな場面が想像されます。こうして宇出津の商業は近郷の村々を含めた生活共同体の中心に位置を占めていたようです。

宇出津港からの積み出しを待つ木炭の山
（昭和 30 年代）

江戸時代の宇出津は、凶作の年や大火に遭った年もありましたが、活気あふれ賑わっていた時代があったことも事実です。そして、いつの時代も、その時代を生きる人々は、精一杯生きてきたと思います。

現在は飽食の時代とも言われ、食べたいものはほぼ口にすることができるし、また、スーパーやショッピングセンター、あるいは通販・ネットショッピングなど、欲しいものが簡単に手に入る時代です。確かに便利で住みやすい生活環境になってきています。

でも今日の暮らしがあるのも、私たちの先代の宇出津びとの日常生活における、一つひとつの知恵の積み重ねがあったということを忘れてはならないと思います。生活をはじめ文明なり文化というものは日々進化しています。当然、今を生きる私たちも知恵を出し合い、人々と協調して生きていかなければならず、農林漁はじめ商いがかつての宇出津に賑わいをもたらした、そんな宇出津を尋ねてみました。（「能都町史」第３巻・第５巻参照）

（10）　子や孫に伝えよう「宇出津びと」

近年、自身の健康づくりの一環として「歩く人」を多く見かけるようになりました。早朝であったり、夜間であったり、一人の人もあれば、２，３人で話をしながらなど様々です。

私が日常的に歩くことは犬との散歩であり、毎日ほぼ決まったコースを歩くのですが、散歩以外でもできるだけ歩くということを心がけています。

歩いていると車に乗っている時には見えない、周囲の状況が詳細に見えてきます。季節の移り変わりを四感で感じたり、落ちているゴミが目についたりするのですが、最近は、やたらと空き地が目に付くようになりました。それも、宇出津という所は、家の間口が狭く奥行きがある家が多く、そんなところが空き地になると、街中の道路から宇出津湾まで見通せる箇所も現れてきます。

家人が亡くなり、その相続人も宇出津におらず、将来的にも戻ってくる見込みがないとなれば、空き家のままにしておくこともできないので、解体ということになるのでしょう。解体される方は、近隣に迷惑をかけられないという気持ちもあり、多額の経費をかけてでもされるのですが、ずっと空き家のまま放置状態の家もあります。町では、空き家を売りたい・貸したいという人と、買いたい・借りたいという人を結び付けるような方策と助成制度も用意していますが、全てが解消される状況には至っていないのが現状です。

このような現状は、宇出津や能登に限ったことではなく、全国の都市部以外の地域では、どこでも見られる状況といっても過言ではないでしょう。そのために多くの自治体は、この対策に手をこまねくことなく知恵を出し合っているのです。

さて近年は、「人口減少」とか「少子高齢社会」といったことが大きな社会問題となっています。これらは他人事のように、行政にのみ委ねていいのだろうかと思うのです。国や自治体が政策的に取り組んでいくことは勿論ですが、その地域でやれることや、あるいは個人としてできることを、夫々が真剣に問題意識を共有するということも大切でないかと思います。

そのためにも、このまま人口減少や少子高齢社会が進むと、私たちの町はどうなるのかということを、一人ひとりがシミュレーションし、危機感を抱くということです。そうすることによって、自ずと良い知恵が湧いてくるかもしれません。そして、これらの問題を単にマイナスと

国鉄能登線の宇出津までの開通は昭和 35 年

とらえるだけではいけないと思います。考え方として、例えば「減少」といっても、減少し続けるというイメージでなく、どこかで落ち着く、あるいは、最低この線まででくい止めようという所を見極めることも大切でないかと。場合によっては、この時を好機ととらえる発想もあるのかなと思わないでもありません。

ところで、前回の物語は「賑わっていた宇出津を尋ねて」を書きました。海上交通が生活物資の最たる輸送手段であった時代の、漁業による多大な収穫とそれを支える四十物の発達、なによりも人が多く集まることによって多くの商売も発生し、近郷近在からも人が集まり、まさに最も賑わった時代を記しました。私が思うに、宇出津が賑わった時代はこの時代と、国鉄能登線が開通した当時

地域の足として利用者も多かった

（昭和 35 年）の頃でないかと思っています。特に後者の場合は、最も人口が多かった時代だということです。

人が多いということは、人の生活を支えるための食糧から生活物資等の需要が増え、すなわち多くのお金も動き、経済が潤うことは理解できます。しかし、お金が回るということには、大きく２通りに分けられると思います。主にその地域で回ることと、地域外にも流れていくという場合です（前述の昭和 35 年頃のお金の循環は、地域内循環が多かった）。勿論、前者の方が地域経済にとっては良いことが理解できると思います。いわゆる地産地消、地元で買い物を!ということです。

例えば、私たち消費者の心理からいって、同等品であれば少しでも安い物を買いたいというのは当然のことです。しかし、地元で買い物をした場合、多少高くてもそれに代わるメリットがあります。すなわち地元での買い物には、見えない付加価値があるのです。それはアフターケアであったり、次なる時のサービスであったり、助け合う仕組みが自然と醸成されていると思います。

資本主義経済は、競争があるから良い品物を多く生み出してきました。ところが近年の競争は価格面の競争を優先することで、品質低下を招いているような気がしてなりません。日本の高度経済成長を支えてきた日本の物づくりの技術は、世界の注目を集め「Made in Japan」を一躍世界のトップに押し上げてきたのです。

この高度経済成長期を支えてきた時代は、宇出津でも「宇出津びと」が最も頑張ってきた時代でないかと思っています。丁度、団塊の世代と呼ばれる人々が宇出津で過ごし、社会へ羽ばたいた時代です。仕事であれ余暇であれ、とにかく精一杯生きており、パソコンや携帯電話・スマホもない、自家用車を

昭和 30 年代の木材搬出の様子

持っている人も少ない時代であったが、何ら不便さも感じさせない、逆に人々の顔は今より生き生きしていた時代だったように思います。

そんな時代は、人々同志の交流も多く、近所の人々が寄り添い助け合って生活し、まさに「向こう三軒両隣」社会が成立していたのです。今、近所を見渡すと、ひとり暮らしや高齢者のみの世帯が多くなってきています。万一の場合に備え、普段からのお付き合いは大切です。近所との交流が希薄化してきていますが、こんな時こそ地域における交流の輪を広めていかなければなりません。家で多く作った惣菜をおすそ分けしていたことが、大変懐かしく思えるこの頃です。

寺や神社の境内で日が暮れるまで遊んでいた子どもたちは、スポーツ少年団やクラブ活動、塾へ通う子らにとって代わり、葉書や手紙での便りがメールにとって代わる今日になるのは社会や時代の流れかもしれません。

栄枯盛衰は世の習いとも言います。

家を建てる際の基礎固め「よいとまけ」

瀬戸物で賑わった「お斉市」（昭和 30 年代）

宇出津で生きてきた「宇出津びと」にもいろんな時代がありました。でも、どの時代を生きてきた宇出津びとも、宇出津を離れて他地に住む宇出津びとにも共通しているのは、宇出津で育って過ごしたことをけっして忘れていないということではないでしょうか。全ての宇出津びとの脳裏には、楽しかったこと、辛かったこと、嬉しかったこと、涙したことなどの思い出の節々が残っていると思います。

現在、宇出津に住んでいる宇出津びとは、近所や地域の人たちとの交流をさらに深め、他地に住んでいる宇出津びとは、故郷をけっして忘れることなく、祭りや盆・正月に帰省した時に、懐かしい宇出津びとと交流する時間を持っていただければと思います。そして、時には子や孫たちを伴っての帰省があれば、なお嬉しく思います。よろしくお願いしますね。宇出津びとさん!

（11）「ごいた」に魅せられた宇出津びと

平成 29 年 1 月 21 日、宇出津公民館多目的ホールでは、新春ごいた大会が行われていました。町外・県外勢（東京・大阪・和歌山・長野ほか）が 11 名（うち 2 名が女性）、地元宇出津勢が 25 名の総勢 36 名による大会でした。公民館のごいた大会は、昭和 50 年代から開催されており、今日まで 40 回を数えるまでになりました。

「ごいた」は仲間内で興じられる遊びで、将棋や碁といったものより、一度の勝負が短時間でつくという手軽さがあります。また、勝負事ということもあり、男性だけに親しまれてきた遊びですが、今では「ごいた」は、日本各地は勿論、世界各国でも楽しまれるようになりました。そしてスマートフォンやインターネットでも楽しめる時代となり、勿論、男女を問わず、老若男女だれでもが遊べる、只今人気急上昇のゲームとして認知されてきました。

奉納「ごいた」（平成 25 年：酒垂神社）

なぜ今頃になって「ごいた」がこうまで多くの人たちに遊ばれるようになったのでしょう。「ごいた」が考案されたのは、江戸末期から明治初期頃とされており、考案されてから百年以上もの間、ずっと宇出津にのみ興じられてきました。近隣の集落で「ごいた」を興じる人や、知っている人もほとんどいない、全く閉鎖された地域での遊びだったのです。

かつての子どもたちの遊びというと、野山を駆けずり回ったり、寺社の境内などが相場であり、子どもたちなりの縦社会の中での遊びや、子どもの中での規律なども身についていったもので、そんななかにおいて「ごいた」も自然と継承されていったものでした。ところが、近年において、子どもなりの忙しさに加え、多様なスポーツや習い事に時間がとられ、自然と子どもたちの縦社会も薄れ、集団から個が主体となり、本来伝承されていく「ごいた」も忘れられていったのです。

こうした実態を憂えた人たちが発起して、平成 11 年 5 月「能都（現：能登）ごいた保存会」がごいたの保存と継承を目的に設立されたのです。ごいた愛好者向けに年 6 回の大会を開催し、参加意欲の向上を目的に「ごいた番付」

を作成するなど、また、児童向けの「ごいた教室」の開催、素人向けの出前講座も積極的に行ってきました。そして、ごいたの遊び方をわかりやすく解説した「ごいた入門」の小冊子を作成するなど広く普及継承に努めてきました。こうした活動が目に留まり、新聞・雑誌・テレビ等にも多く紹介されてきました。

とは言っても、ごいた人口が急激に増えるというまでには至らなかったのですが、平成18年にＳＮＳ（インターネット）のコミュニティースペースに、「伝承娯楽ごいた」を紹介したところ、その反響は大きく、ゲームとしてとらえた人たちが、このスペースの仲間となってきました。「ごいた」というゲームの面白さを理解できた人たちなので、その面白さを他の人にも教え広め、「ごいた」を楽しむ人の輪が広がっていきました。

まもなく東京では、ボードゲームを楽しむ人たちが集まる場所で、ごいたの月例会が行われるようになり、僅か1年ばかりで「能登ごいた保存会東京支部」が設立されました。宇出津からは12名が上京し、設立を祝うとともに、初めて宇出津以外の地でごいたでの交流が行われたのでした。

ごいたは、宇出津では竹製の手作り駒で楽しまれていますが、楽しむ人が増えてくると、竹駒の代わりにカード版ごいたを製作する人（法人）も現れ、その需要に応えられていました。その

能登ごいた保存会東京支部設立における
銘板贈呈（平成19年）

日本を代表するゲームとして「ごいた」も
展示されている（アミューズメント研究所）

シンポジウムで発表するごいた保存会長
（平成22年：大阪）

際は能登ごいた保存会の監修を受け、全ての商品には、「能登半島宇出津の伝承娯楽」の文字が付されていたのは言うまでもないことです。

その後、ごいたは町の無形文化財に指定され、また、ごいたの商品化が進むにつれ、商標登録も行いました。そして、平成22年11月には、大阪商業大学アミューズメント（娯楽）研究所が主催する「日本伝統ゲームの継承・普及と地域振興－ゲームがまちを元気にする」というシンポジウムに、将棋や囲碁などと並んで「ごいたの町」として参加してきました。

現在では、大阪・神奈川支部も誕生しており、４月には長野支部の設立も予定されています。特に大阪支部の活動には目を見張る実行力と活動があります。商店街のイベントから大学の学園祭などにも積極的に「ごいた」の面白さを紹介し、同時に能登（宇出津）の魅力（食材・自然・祭礼など）も紹介しているのです。大阪支部会員のうち10名程度は実際に宇出津を訪ねているので、説得力ある紹介をしてくれています。

こうして今では、日本では「ごいた人口」は約一万人と見込んでおりますし、海外でも各種のごいたカードがゲームマーケットで販売されている状況であるので、まだまだ普及途上であるとみています。

このように、ここまでごいたが普及してくると、近い将来への備えと言うか、ごいたの管理をしっかりしていかねばならないという声を聞くようになりました。こうして昨年５月、ごいたの普及継承のほか、ごいた関連グッズの管理と適正なる認可、そして「ルール」の管理を行っていくことなどを目的に、「日本ごいた協会」が設立されました。

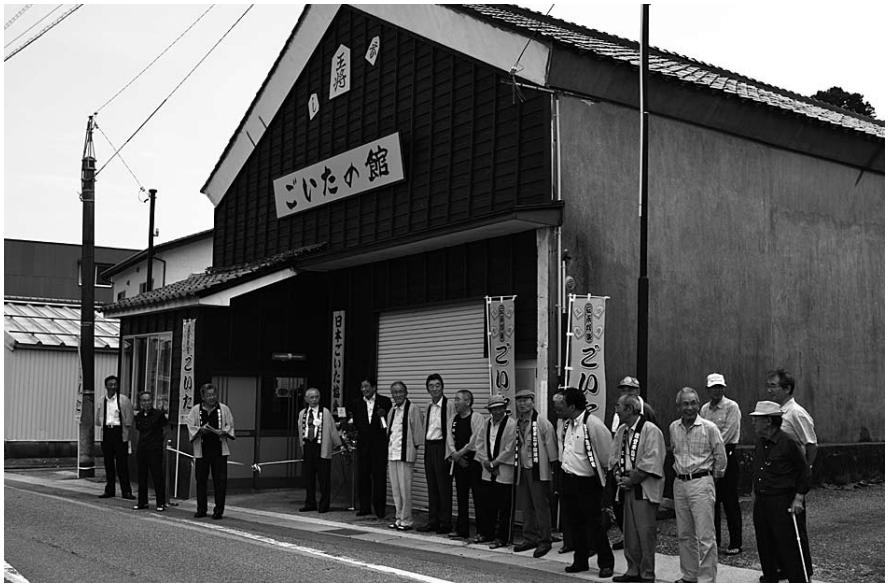
併せて、ここまで全国的に広がりを見せてきたことで、平成26年度から都道府県対抗交流大会を開催することになり、隔年毎に能登会場、隔年は支部等持ち回り会場としていくことが決まりました。昨年の第３回能登大会は、町内参加者31名に対し、県外勢49名の総勢80名での開催でした。

また、能登ごいた保存会設立時からの念願であった「ごいた道場」が、設立17年目にして、港のそばに「ごいたの館」として平成27年６月にオープンしました。ごいたを楽しめると同時に、

第２回都道府県対抗交流東京大会
（東京ビックサイト）

第３回都道府県対抗交流能登大会での
熱戦模様

ごいたの館オープニングセレモニー（平成 28 年）



ごいたの歴史や各種資料、関連グッズの展示がされてあります。町県外勢は、宇出津の人とごいた交流を楽しみにここを訪れ、記念写真を撮っている姿をよく見かけ、まさにここに「ごいたの聖地」としての位置づけが確立したのであります。

宇出津で開催されるごいたの大会は、年６回（奇数月）開催されますが、これらの大会に参加するために全国から愛好者がやってきます。その度に彼らは、その季節の能登の料理や酒を楽しんでいきます。こんな彼らを、単に「交流人口」という言葉で語ることはしたくありません。彼らも立派な「宇出津びと」だと思っています。

ごいたを覚え、ごいたの聖地を訪ねてくる宇出津びとが、どんどん増えてきています。本家の宇出津びともうかうかしてられません。ねっ！宇出津びとさん。

ごいたの館で指導を受ける
宇出津小学校伝承倶楽部

さて、11 回にわたって記してきた宇出津物語は、今回で最終となります。

今までの作中に誤りなどがあった場合は、全て筆者の力不足・勉強不足によるものでありますことを申し添え致します。

ご精読ありがとうございました。

「宇出津物語」
発行者　〒 927-0433　石川県鳳珠郡能登町字宇出津ト - 29 - 2
能登町立宇出津公民館
発行日　平成 29 年 4 月 20 日
印刷所　㈲梅印刷所

宇出津物語　（12）宇出津びとの憩いの場所「城山」

全国には「城山」という名前の山が 276 山あるそうです。宇出津びとがよく足を運んだ「城山」は、山の名前ではなく地域の名称であり、中世の山城に由来すると考えられます。このように地域の名称としての城山は、全国でも山名よりもっと多く存在するであろうと想像します。実際、能登町内でも宇出津と松波に存在しています。いずれも山城に由来するものです。

城山は、昭和 43 年の能登半島国定公園指定における区域に含まれ、指定区域には「遠島山」と表記されています。国定公園指定を前後して、レストハウス、郷土館、しらさぎ橋、菖蒲園、歴史民俗資料館などが次々と整備されました。国鉄能登線の開通後の第１次能登半島観光ブーム、そしてカニ族で賑わった第２次ブームには、ユースホステルや民宿、旅館、国民宿舎も多くの観光客で賑わっていたのを覚えています。

さて、この遠島山公園ですが、「城山」と呼ぶ方が似合う私たちの青少年期頃は、男子であれば遊歩道から海岸まで下りてサザエを捕ったり、あるいは初々しい男女のデート場所でもあったり、青少年時代の宇出津びとであれば、ほとんどが目的の違いはあれ、この「城山」は思い出深い場所だったのではないでしょうか。また、人によっては松茸を採ったり、正月飾り用のウラジロを摘んだり、日常の散歩コースであったりと、そして近年では、森林浴やトレッキングコースとして少ないながらも訪れる人は絶えない場所です。というか、適度に管理された遊歩道がファンを集めているのでしょう。そういえば、昭和 30 年代初期頃の写真には、既に立派な遊歩道が整備されており、元もとあった**けものみち**が、それこそ古くから地域の人びとに利用されていたのではないかと思われます。

私が少年期の城山は、児童館がありピンポンで遊んだり、行事にも参加したことを思い出します。そして何より印象深いのが、益谷秀次像が眺めるように、紫雲荘横から眺めた宇出津の街並みの眺望と、大きな椎の木の下で椎の実を拾ったこと。また、遊歩道に自転車を乗り入れ、先端まで行って離れ島や入り江が多い高倉海岸、なだらかな地形の穴水・七尾方面、そして海越しの北アルプスの山々の景色に、子どもながら見とれた記憶が甦ります。

今では、先述の施設に加え、益谷記念館・西谷記念館・羽根万象美術館や児童遊園も整備され、ちょっとした文化ゾーンを形成しています。公園内の植生はほとんどが自生で、月日が経つことで木々も成長し、今では宇出津の街並みも、茂った樹木で見えにくくなりました。一方、「城山松」の異名を持つ立派な赤松林ですが、松くい虫の被害を受け、町では防除対策に余念がありませんが、その数は少しずつ減っている現状です。それでも樹高２０ｍを超す赤松の雄姿は見事です。

今の時代、余暇の使い方や日常生活においても、時間のゆとり（自由時間）が少なくなってきたように感じられます。というか、娯楽や趣味などで多様化してきた時代、情報化の進んだ時代からみると、のんびりと公園遊歩道を散策する時間がとれないのかもしれませんが、自然観察をするなら最適地と思います。遊歩道沿いに自生する植物の中には、絶滅危惧種を見つけることもできますし、森林浴をしながら観察して歩くのも十分にリフレッシュになるでしょう。

ところで、観光ブーム時に整備された公園内名所の呼称には、なかなか面白いものがあります。こんな言い方をすると当局か

らお叱りを受けますが、おそらく当時の担当者が知恵を絞って考案した呼称だと思います。「月見御殿跡」「米流し坂」「船隠し」「なめり坂」「馬洗い池」「本丸跡」などですが、それでも私自身も観光客などには解説も交えてよく説明していました。歴史や文化というものは、その時々で創られ、あるいは成長していくこともあります。これらの呼称は、今では立派に認知されていると思っています。

また、児童館があった頃には、こどもの日に合わせレクリェーション大会が行われ、各町内旗を掲げ人びとが狭い園地に参集し、児童を中心とした競技で盛り上がった時期もありました。旧ユースホステルがある区域は「小崎山台地」と言い、そこの桜の開花にあわせボンボリが設置され、花見客で賑わった時もあり、また、輪島・宇出津間の海岸線を走る「奥能登定期観光バス」が、多くの観光客を乗せてこの公園にも立ち寄っていた時もあり、城山は時代によっては地域の人びとや観光客など、多くの人たちが訪れる場所だったのです。

このような賑わいを見せていた場面は、いったいどこへ消えてしまったのでしょう。というか、城山は古の頃から現在まで、宇出津の街並みの変遷から、宇出津湾を行きかう船や、沖合いの定置網漁風景などをずっと眺めてきたのです。私たち人間の一生は、長くても百年程度ですが、城山は縄文時代から、いやそれ以前から宇出津の移り変わりを見続けてきたのです。そう思うと、城山そのものが身近に見えてきます。人間の営みや喜怒哀楽、長い年月における自然の変化など、私たちが生きている年月などは僅かな時間です。縄文時代から戦国時代、江戸時代、そして激動の近代文明社会（明治・大正・昭和・平成）と、この地に多くの人びとが生きてきたのは事実です。こうして宇出津を観てきた「城山」にさらに親しみを覚えてきます。

遊歩道「潮騒の小径」を歩いて岬の先端へ行ってみませんか。先端の様子はここ半世紀の間で大きく変化しています。ベンチの基礎は深く露出し、風化によって表土の浸食が進んでいます。それでも松は薄い表土に根を張り懸命に生きています。まさに城山の生命力を感じるとともに、城山で育ってきた「宇出津びと」の逞しさのようなものも感じます。

そんなことを感じながら、縄文時代と全く変わらない姿を見せてくれているであろう、海越しの北アルプスの山々を、時間が経つのを忘れて眺めることが、私のいや宇出津びとの至福のひとときでないかと思うのです。

宇出津物語（13）世界一の縄文土器づくりで燃えた宇出津びと

昭和63年３月、能都町議会の最終日、新年度予算が可決成立した。その中に、見慣れない補助金 500 万円があった。日本はバブル最盛期の真っただ中、自治体においても競い合うように、大型積極的予算がみられ、また「まちづくり」の名のもと、ハード・ソフト問わず多くの事業が展開されていました。そんななか竹下内閣の「ふるさと創生一億円事業」は、かつてない斬新で自由に使える事業として、自治体の知恵比べ的なものであり、ある面では、刺激的かつ恵まれた時代であったことを想い出します。

さて、能都町のこの500万円の補助金は、当時の議会でも質問攻めにあい、町長答弁の主な内容は「将来を担う若者たちが町おこしとして取り組もうとしている。そんな熱意ある若者たちに応える補助金である」と言ったかと記憶しています。

そして４月 20 日、「世界一の縄文土器づくり」実行委員会の設立総会が、町内の20の各種職域・団体を集めて行われました。丁度その頃、能都町には日本の縄文時代の教科書を刷新するほど大きな事実を生み出した「真脇遺跡」が注目を集め、町では俄かに真脇遺跡を活用した町づくりが囁かれ、その動きも芽生えつつありました。この実行委員会は、真脇遺跡から出土した縄文土器をモデルとし、世界一大きな縄文土器を町民こぞって製作し、新たな町の象徴として住民も観光客も眺められるところに飾ろうというのが目的に組織されました。その製作に係る事業補助金が 500 万円だったのです。

この実行委員会組織の中心となったのが能都町商工会青年部であり、役場職員、漁協・農協職員や民間の企業各社に、青年団やＰＴＡ連合会、体育協会・婦人会などの諸団体などで構成されていました。そして技術指導には、宇出津出身で金沢を拠点に陶芸家として活躍されている飯田雪峰氏があたりました。使用する粘土は、真脇遺跡近くから採取した土を混ぜて開発され、当時、商工会青年部が特産品開発事業で考案したものでした。

その製作場所に選定された宇出津新港の一角は、埋め立て事業が完了したばかりで、道路と緑地公園のみが整備されていた更地でした。そんな場所に 8.4m×12mの鉄パイプ組でトタンを張った高さ 9.5mの簡易な小屋が建てられました。小屋を建てる前に、小屋の中心部に 3.5m四方の鋼鉄製の基台が設置されました。これは完成後に運搬することも視野に入れた丈夫な造りで、かつ土器を焼く時の煙突機能ももたせた設計となっていました。

こうして、４月29日から土器の素地づくり、いわゆる製作がはじまりました。各団体からの作業協力者の当番表も作成し、一日８人前後が作業にやってきました。ところが粘土を積み上げていっても、亀裂がはいったり自重で崩れたりと、大きな壁にぶつかり１カ月間は試行錯誤を繰り返すのみでした。そんな時、たまたま世界一の大皿を作った金沢在住の方がテレビに出演されており、藁にもすがる思いでその方を訪ねたのでした。木工芸家で後に人間国宝にも認定された灰外達夫氏でした。木工芸家が陶芸もされるのかと疑問に思ったのですが、職人には共通するものがあったのですね。

灰外氏との出会いは運命を変える出会いとなりました。氏も若い人たちの町おこしにかける思いに共感され、自身も珠洲出身であるということもあり、能登を応援することにはやぶさかでないと即了承してくれたのでした。大きい焼き物を作るには、それに見合う粘土を使わなければならないということで、縄文粘土を手に取るなり、「この粘土では大きいものは作れない。私が粘土を作ります」という返事をすぐいただいたのでした。自身の仕事を後回しにして粘土づくりにかかり、初めて会

ってから僅か２週間で粘土を調合され、６月５日から新たな粘土での製作作業を開始しました。

陶芸経験のある人は理解できるでしょうが、粘土は乾燥である程度収縮するし、焼いても収縮します。１割程度の収縮は普通ですが、粘土の種類でも違いが出てきます。大きいものを作る時ほど、収縮率の小さい粘土を使うということです。灰外氏が造られた粘土を使うようになってからは、ほぼ順調に積み上げていくことができました。高さ 1.5mまでは 10cm の厚さ、それ以降徐々に薄くしてゆき、本体にかかる自重をおさえてゆきます。高さ 2.5mでは６cm、3.5mでは５cm、４mでは４cm、4.5mでは３cm の厚さとなっていきました。そして１回の積み上げ作業後３～４日間は乾燥管理日（作業の休日）を設け、本体の強度を高めます。６月末には高さが 2.2m、７月末には 3.7m、そして８月 17 日にとうとう目標の 4.5m に達したのでした。この間の２ヵ月半は、飯田氏は毎回の積み上げ日（延べ 22 回）に、灰外氏にあっても 10 回以上の、いずれも金沢から指導に来られ、自身の本業があるにも関わらず、本当に献身的な指導協力をいただきました。

その後、２カ月間自然乾燥させている間、小屋の中では土器の周囲に八角柱で鉄骨を組み、外側にはトタンを、内側には断熱材を貼り、焚口となる炉を下部４カ所に設けた仮設の窯を設営しました。

10 月 25 日に火入れを行い、４カ所から木材を投入して焚き、窯内部の温度がおよそ 800℃に達した時点で火を止め、炉を塞いで自然冷却に入いりました。この火止めの時の小屋の中は、仮設窯としての限界もきており、壮絶な風景だったのを覚えています。

こうして出来上がった高さ 4.44m（焼成後）の世界一大きい縄文土器の完成をみたのでした。２年後の 10 月 18 日、エアーローラー（ゴム製の筒：長さ 10m、径 0.64m、重さ 380kg）を地上に６本並べ、土器が載っている鋼鉄製の基台をエアーローラーに載せ、製作にかかわった人や児童・園児も加わり約 500 人が、木遣りや太鼓にあわせで引っ張っぱり、コロと同じ原理で約 200m離れた現在の展示場まで、無事移動させることができました。

時の広場として整備された場所に、八角形のガラス張りの建屋に納まった世界一大きい縄文土器は、製作当時を知る人たちにとって能都町の新たなランドマークとして位置づけされています。今では立派な能登のシンボルです。作業協力者は延べ 1,676 人、土器に刻まれた協力者 576 名の名前。事業開始前によく囁かれました。「はんかくさい連中やな」「だらぶちらっちゃゴモなことを」。**はんかくさい**、**だらな**、**ごもな**仲間たちは、勿論「宇出津びと」だったのでした。